

ハエ類の採集方法に関する研究

第2報 金網製ハエトラップの脚の高さの効果について

長崎大学風土病研究所衛生動物学研究室（主任 大森南三郎教授）

大森南三郎・末永 斂
おもり なん ぎぶ ろう すえ なが おさむ

長崎県大村保健所（所長 福田通男）

福田通男
よく だ みち お

本研究に要した費用の一部は文部省科学試験研究費補助金によつた。ここに記して謝意を表する。

緒 言

我々は魚肉を餌とした金網トラップを Blowflies の棲息密度を推定する一つ的手段として用いているが、トラップの構造、設置場所、脚の高さ、餌の質及び量等の異なるに従つて採集能率に差が生ずるのである事は容易に考えられる。古くからこの種のハエトラップを使用してハエ類を採集する事が広く行

われてきたが、採集能率を左右すると思われる一つの要因について詳しく吟味した研究は殆んど見当たらない。我々は先にトラップの構造と設置場所とが採集能率に及ぼす効果について報告したが、今回は同質、同構造のトラップを使用して、脚高を色々に変えてその効果を調べた結果について報告する。

採集方法及び場所

本実験に使用したトラップは16メッシュの銅金網製で、直径20cm、高さ25cm、倒ロートの高さ13cmのもので、脚を銅線で作りその高さを自由に變更できるようにした。餌は魚肉（アジ又はイワシ）を用い、約150gを細かく切つて購入後1～2日経過したものを使用した。餌を直径13cm、深さ1.9cmの小皿になるべく平たく盛ると魚肉の上表は皿の置かれている台の平面から約3cmの高さとなる。これを上記トラップ下に置くとトラップの脚の高さが3cm以上になると側面から皿に盛つた肉が完全にみえる。

実験を行つた場所は東西に長く建つている研究所の二階建の建物と、平家の整肢療育院との略中間で、それぞれから約15mの地点に、これと平行し

て即ち東西に長く、60cm×220cm、高さ75cmの机を置き、その上にトラップを後に述べるような方法で設置した。机の東方及び西方には約8m及び10m離れて7m及び10mのクスノキがあるが、その蔭は机上には及ばなかつた。西方は100m位隔れて木立や建築物があり、更に西方には低い丘陵が連なつているのに、東方は広く開けて畑、水田地帯に連なつているので肉眼的にはより明るい感じを与えた。

実験は1954年の秋と1955年の春にそれぞれ異なる方法で行つたが混同を防ぐために各実験方法の詳細はそれぞれの実験結果の記述の前に記載する事にしたい。

実 験

本実験は1954年11月20日から12月1日までの間、雨天を除いた10日間に、10個の脚高の異なるト

ラップが、机上に相接近して一列に描かれた10の円印（固定された位置）の上を一巡するように計画

Table 1 Fly catch per setting position per day in experiment A made in Nov., 1954.

Figures from 1 to 10 represent the trap number. Those given in parentheses represent the number of flies trapped per setting position per day. Catches were made making each of ten traps to take a round of ten position during ten days.

Day	Setting position (Fixed)										Total
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1st	4 (123)	5 (103)	6 (120)	7 (112)	8 (99)	9 (96)	10 (79)	1 (2)	2 (91)	3 (156)	981
2nd	5 (120)	6 (203)	7 (207)	8 (180)	9 (140)	10 (89)	1 (7)	2 (67)	3 (129)	4 (392)	1534
3rd	6 (196)	7 (222)	8 (185)	9 (131)	10 (80)	1 (11)	2 (88)	3 (139)	4 (248)	5 (569)	1869
4th	7 (383)	8 (237)	9 (215)	10 (160)	1 (9)	2 (25)	3 (117)	4 (220)	5 (476)	6 (775)	2617
5th	8 (315)	9 (194)	10 (155)	1 (11)	2 (23)	3 (104)	4 (345)	5 (194)	6 (360)	7 (646)	2347
6th	9 (135)	10 (79)	1 (20)	2 (79)	3 (152)	4 (204)	5 (122)	6 (352)	7 (445)	8 (327)	1915
7th	10 (58)	1 (3)	2 (37)	3 (73)	4 (39)	5 (60)	6 (99)	7 (167)	8 (171)	9 (142)	849
8th	1 (9)	2 (69)	3 (84)	4 (72)	5 (81)	6 (107)	7 (92)	8 (82)	9 (71)	10 (19)	686
9th	2 (58)	3 (96)	4 (94)	5 (138)	6 (249)	7 (238)	8 (146)	9 (119)	10 (80)	1 (15)	1233
10th	3 (166)	4 (88)	5 (115)	6 (179)	7 (336)	8 (277)	9 (254)	10 (196)	1 (9)	2 (63)	1683
Total flies	1563	1294	1232	1135	1208	1211	1349	1538	2080	3104	15714
No. of species	26	26	24	28	25	26	26	25	27	27	33

Total flies per trap at ten positions during ten days.

Trap No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	Total
Leg height (cm)	0.3	0.6	1.0	1.5	2.0	3.0	4.5	6.0	8.0	10.0	
Total flies	96	600	1216	1825	1978	2640	2848	2019	1497	995	15714
No. of species	14	25	28	26	26	28	29	26	24	20	33

From the result of analysis of variance, significant differences are found among setting positions, traps, and days respectively at 1 per cent level and the difference larger than 820 between any two totals of flies can be regarded as significant at 5 per cent level.

し、トラップを毎日9時から16時まで設置して採集を行った。

この実験で各場所（円印の位置）、各採集日及び各トラップ毎に採集されたハエ数は第1表に示す通りで、これらの各要因について分散分析を行ってみると、各要因の水準間には共に有意差のある事が認められ、合計数において820以上の差がある場合に2つの水準間に有意差が認め得る。

但し採集日間に差のある事は、温度、雲量、風速等の異なる日に実験を行っているので当然の事だと思われるが目的外の事であるので今は問題にしない。

各場所での合計数を図に示すと第1図のように東端が有意的に多い事がわかる。西端は中間のものとの間に有意の差はないがその数はかなり多いからト

ラップの列の端に多少の誘引効果があるように思われる。東方はある誘引効果（恐らく明るさによるものと思われる）に列端の効果が加わって著しく誘引効果が現われたものと思われる。即ち設置場所によつて著しく誘引効果に差のある事を認めねばならない。

次に脚高と採集されたハエ数との関係は第2図からわかるように3.0cmと4.5cmのトラップで特に多く、それよりも脚高が高くても低くても採集数は少くなる。この事はハエが餌に誘引されて集る場合には脚高の高い程好都合であるが、満腹し或は何かの原因で飛び立つ時に脚高が或程度以上に高いとトラップ外へ逃げるようになる事を暗示するもので

ある。即ちこの現象は前半は餌の置かれている場所の明るさに関係し、後半はハエの飛び立つ角度に関係して結果されるものと推測される。

ここで問題になる事は場所或は脚高と採集されるハエの種類との関係である。これを吟味するために

Fig. 1 Effect of setting position.

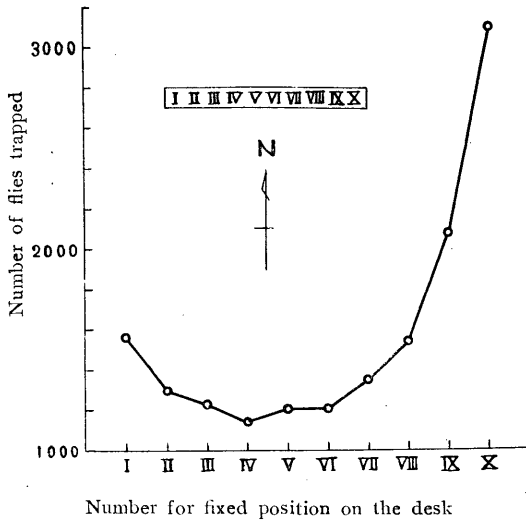


Fig. 2 Effect of leg height.

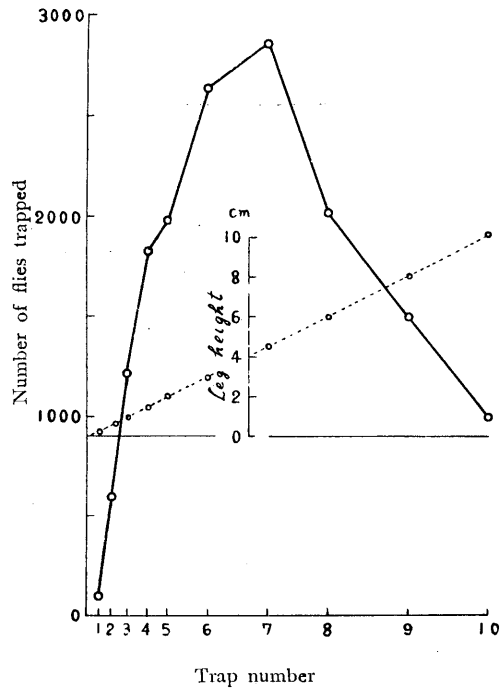


Table 2 Species name of flies trapped in experiment A made in November, 1954.

a	<i>Ophyra leucostoma</i>	g	<i>Hemipyrellia ligurriens</i>
	<i>Ophyra nigra</i>	h	<i>Chrysomya pinguis</i>
	<i>Ophyra chalcogaster</i>		<i>Chrysomya megacephala</i>
b	<i>Muscina stabulans</i> <i>Muscina pabulorum</i>	i	<i>Sarcophaga melanura</i> <i>Sarcophaga albiceps</i> <i>Sarcophaga peregrina</i> <i>Sarcophaga similis</i> <i>Sarcophaga misera</i>
c	<i>Graphomyia maculata</i>		
d	<i>Musca domestica vicina</i> <i>Musca hervei</i>		
e	<i>Calliphora lata</i> <i>Calliphora grahami</i> <i>Tricerato pyga calliphoroides</i>		j
f	<i>Lucilia sericata</i>		
	<i>Lucilia cuprina</i>		
	<i>Lucilia illustris</i>		
	<i>Lucilia caesar</i>		
	<i>Lucilia ampullacea</i>		
	<i>Lucilia porphyrina</i>		

To each of dominant species and groups, alphabetical letters are given in order to simplify the tables follow this table.

Table 3 Number of flies of each species or group at each setting position during ten days.

Species or group	Setting Position (Fixed)									
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
a	9	13	8	12	8	13	15	7	18	13
b	1	2	3	2	3	2	3	3	5	9
c	4	1	1	1	0	0	4	2	2	9
d	47	60	83	61	77	74	78	73	90	91
e	630	528	485	531	551	525	477	486	765	927
f	252	223	202	182	176	197	162	260	354	536
g	0	4	0	1	0	1	2	3	4	6
h	564	396	409	303	344	369	569	656	783	1426
i	35	43	25	22	26	14	22	31	39	61
j	21	24	16	20	23	16	17	17	20	26
Total	1563	1294	1232	1135	1208	1211	1349	1538	2080	3104

Table 4 Number of flies of each species or group trapped in each trap during ten days.

Species or group	Trap number									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
a	9	8	10	22	15	16	12	14	6	4
b	0	3	3	1	1	7	6	1	5	6
c	0	0	3	2	2	6	6	3	2	0
d	49	63	72	93	89	106	98	51	57	56
e	4	268	584	604	691	840	1029	848	648	389
f	15	115	170	269	357	480	470	330	225	113
g	0	2	3	5	5	3	2	1	0	0
h	3	90	311	769	746	1083	1159	726	522	410
i	3	28	28	41	56	65	40	25	22	10
j	13	23	32	19	16	34	26	20	10	7
Total	96	600	1216	1825	1978	2640	2848	2019	1497	995

第2表のように整理した種類又は群について第3及び4表に示すように採集場所毎、及びトラップ毎の採集数を出して各場所毎、及び各トラップ毎のハエ群集間の構成の比較を相関係数法によつて求めて図示すると第3及び4図の通りとなる。

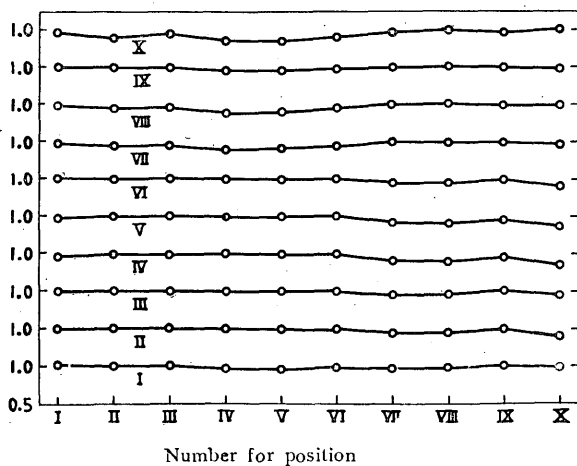
第3図からわかるように場所間には殆んど構成の差がなく、能率のよい場所では各種類が比例的に多く集つている事が窺われる。これに反して各トラツ

プ間には脚高 0.3cm のトラツプでは著しく異なるが、1.5cm 以上のものでは殆んど同様であつて、0.6 及び 1.0cm のトラツプでのものはその中間型とみなし得る。

脚高 0.3cm のトラツプのハエ構成が他と著しく異なる点は第4表からわかるようにイエバエが優占種になつており、1.5cm 以上のトラツプで数の多いオビキンバエ類 (主として *Chrysomya megacephala*)

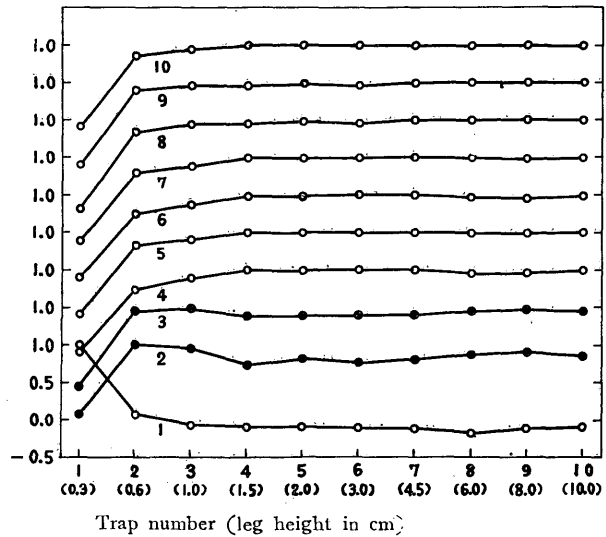
及びクロバエ類 (主として *Calliphora lata*) 等が非常に少ない事である。そこで各トラツプによるイエバエの採集数を百分率法によつて比較してみると第5図に示すように特に 3.0cm のトラツプに多く、1.5, 2.0, 4.5cm のトラツプではこれに次いで多く、それよりも高くても低くても採集数が少なくなつている。この事からわかるように 0.3cm のトラツプではイエバエが多いのではなく、体の大型である数種類が侵入できなかつた事がその原因であつて 0.6 及び 1.0cm のトラツプが中間型であることもこれらのハエ類の侵入が 1.5cm 以上のトラツプに比較して困難であつた事によるものと思われる。

Fig. 3 Ten series of correlation coefficients obtained by the reciprocal treatments of ten fly associations for setting position.



以上を要するに同一環境内で完全に接近して並べられた場合にも場所の効果が現われ、より開けた明るく感じられる方向と、列の端との組合された条件下でその効果が大きい。又脚高の効果についてみると、1.0cm 以下のトラップでは脚高が低くなるにつれて大型のハエ類が侵入出来なくなるが、1.5cm 以上のトラップでは採集されるハエ群集の構成には殆んど差がなく、3.0~4.5cm のものが最も採集能率が優秀である。この効果は餌の置かれている場所の明るさと満腹したものの飛び立つ角度に関係して現われるように思われる。

Fig. 4 Ten series of correlation coefficients obtained by the reciprocal treatments of ten fly associations for traps.



実験 B

この実験は同じくハエトラップの脚高の効果を調べるために計画し、前回と同一の場所で行ったが、机上における位置の効果を除くために前回の実験で

位置的効果の最大であった方向へ机を向け従って一列に並べるトラップの列がその方向に直角になるようにし、而も机上でのトラップの位置は毎日乱数表によって決めた。トラップは同質、同型、同じ新しさの、但し脚高が2, 3, 4, 5及び6cm と異なるものをそれぞれ4個ずつ用意し、無作為に各脚高のもの1つずつ計5個を1組として、4組をつた。その2組ずつ即ち10個のトラップを9時から10時までの1時間、あらかじめ乱数表で決められた、机上の10の位置に並べ、10時に全部回収して、直ちに他の2組を新しい位置に並べて10時から11時まで放置した。先に回収したトラップはハエを取り出して記録した後、第3時間目の使用にまわした。この様にして2組からなる10個のトラップは他の2組と1時間交替で使用され、各2組は6月17日それぞれ3回ずつ使用された。

全く同様の実験を同じ場所、同じ方法で6月27日に、もう一度繰返して行つた。

以上の実験は5種の脚高のトラップによる4回の繰返し実験とみなす事が出来る。

トラップと時間との組合せにおけるハエの採集数、及び繰返しをぬりつぶした補助表を示すと第5表の通りであり、これから得られる要因分析表は第6表の通りである。即ち脚高を異にするトラップ間

Fig. 5 60% confidence intervals for population percentage number of house fly, *Musca domestica vicina* collected by each trap during ten days in Nov., 1954.

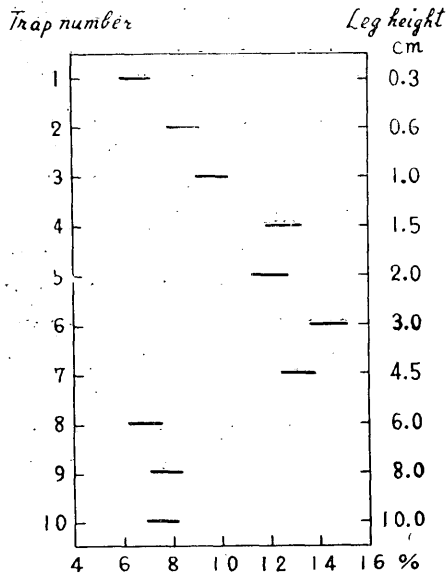


Table 5 Fly catches by five traps of different leg height (Four replications).

Time	June 17, 1955					June 17, 1955				
	Leg height (cm)					Leg height (cm)				
	2	3	4	5	6	2	3	4	5	6
9~10	7	11	19	21	21	13	19	15	31	20
10~11	6	14	15	18	11	5	13	23	12	11
11~12	4	7	11	16	6	9	9	30	29	6
12~13	4	5	18	6	9	1	6	9	21	8
13~14	2	13	22	17	19	5	16	33	25	25
14~15	9	6	38	45	26	12	13	26	33	35
Total	32	56	123	123	92	45	76	136	151	105

June 21, 1955 June 21, 1955

Time	June 21, 1955					June 21, 1955				
	Leg height (cm)					Leg height (cm)				
	2	3	4	5	6	2	3	4	5	6
9~10	8	24	18	17	16	5	10	20	15	8
10~11	6	8	14	14	10	8	11	16	12	9
11~12	5	4	6	12	11	6	3	11	6	9
12~13	7	7	16	14	6	6	5	9	28	11
13~14	12	23	12	12	27	11	17	54	30	22
14~15	4	10	31	12	11	16	15	12	15	7
Total	42	76	97	81	81	52	61	122	106	66

Totals of four replications

Time	Leg height (cm)					Total
	2	3	4	5	6	
9~10	33	64	72	84	65	318
10~11	25	46	68	56	41	236
11~12	24	23	58	63	32	200
12~13	18	23	52	69	34	196
13~14	30	69	121	84	93	397
14~15	41	44	107	105	79	376
Total	171	269	478	461	344	1723

及び採集時間間には1%以下の危険率で有意差が認められ、トラップと採集時間間の交互作用は起っていないと解釈出来る。ハエの摂食活動は主として気温と雲量によつて大きく支配されるので採集時間間には有意差のある事は当然であるが目的外の事であるので今は採りあげない。

脚高の効果は第6図に示すように4cm 或はこれ

Table 6 Analysis of variance of the results shown in Table 5.

Source of Variation	Sum of Squares	Degrees of Freedom	Mean Square	Variance Ratio
H	2799.88	5-1=4	699.97	13.59**
T	1971.64	6-1=5	394.33	7.66**
HT	768.32	4×5=20	38.42	
R (HT)	4633.75	(4-1)×30=90	51.49	

HTR 10173.59 5×6×4-1=119

H : Height of legs of fly traps

T : Time of catches

HT : Interaction

R (HT) : Replication

HTR : Total

** : Significant at 1% level

Fig. 6 Significant differences occurring between any two total numbers of flies are represented by solidlines.

(Least significant differences is 73.74)

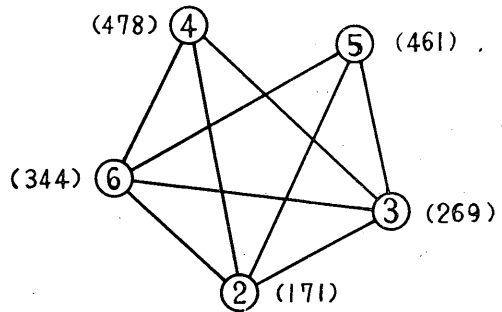
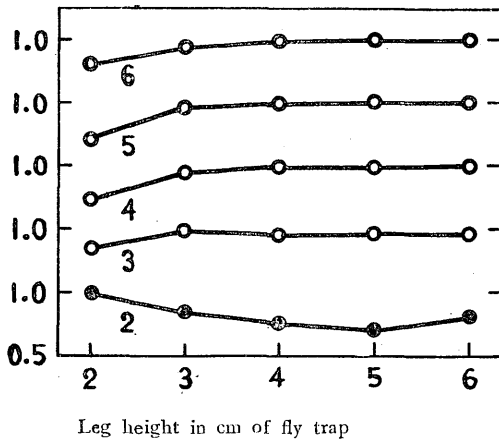


Figure in circle represents the height in cm of legs of trap. Figure in parenthesis represents the total number of flies collected in each trap of different leg height in experiment B.

に近いものが最大であると考えられる。

しかしここでも各トラップ毎のハエ群集の組成を吟味してみる必要があるので第7表に整理したような各トラップ毎のハエ群集についてその構成を相関係数法により比較してみると第7図のようになる。図に示すように脚高3~6cmの系列群は互に近似しているのに、2cmの系列だけが趣を異にしている。これは主として脚高4~6cmで多く採集されるミドリキンバエ、ヒロズキンバエが2cmでは非常に少なかった事、及び3~6cmでは3乃至4位と比較的少なかったセンチクバエとナミニクバエ

Fig. 7 Five series of correlation coefficients obtained by the reciprocal treatments of five fly associations obtained by traps of different leg height.



が2cmでは少くはなつていない事などによる。
 上記のキンバエ類は雌もそうであるが特に雄が脚高の低いものに少い傾向がみられる。ところが6月の採集では11月に比して雄の比率が急増しているので益々この傾向が著しくなつたものと思われる。一方、上記のニクバエ類は2cm位の低さでは採集される個体数が少くはならず、6月に増加している雄も亦然りであり、特にセンチニクバエの雄は脚高の低いもの程多く入つている。これらの種類の動きが、秋個体数の極めて多かつたオオクロバエとかオビキンバエ等が殆んど採れないので、6月には表面に大きく浮び上つて来て脚高2cmのトラップでのハエ

考 察

今回の実験は金網トラップの下に入れる餌(魚肉)の表面までの高さがトラップの置かれて台平面から約3cmの場合についてトラップの脚高が台平面からどの程度の高さにある時最も採集能率が最大であるかを調査する事が目的であつた。

1954年の11月に行つた実験から4.5cmの脚高のものが最も能率がよい事がわかり、1955年6月に行つた実験から4~5cmの高さが効果的である事がわかつた。従つて大体4.5cmの脚高が効果的であるといつてもよいように思う。

Table 7 The total numbers of flies of a species or group collected in experiment B made in June, 1955.

Species	Leg height (cm)				
	2	3	4	5	6
<i>Ophyra leucostoma</i>					
<i>Ophyra chalcogaster</i>	5	10	13	11	8
<i>Fannia scalaris</i>	1	3	4	2	1
<i>Muscina stabulans</i>	2	6	1	4	4
<i>Musca domestica vicina</i>	0	0	1	0	0
<i>Calliphora grahami</i>	12	15	13	15	11
<i>Lucilia sericata</i>					
<i>Lucilia cuprina</i>	23	46	71	92	79
<i>Lucilia illustris</i>					
<i>Lucilia caesar</i>	41	104	272	248	180
<i>Hemipyrellia ligurriens</i>	1	2	4	5	4
<i>Chrysomya pinguis</i>					
<i>Chrysomya megacephala</i>	3	8	18	24	20
<i>Sarcophaga melanura</i>	14	9	11	14	3
<i>Sarcophaga peregrina</i>	36	31	29	23	17
<i>Sarcophaga similis</i>	23	25	25	13	11
<i>Sarcophaga misera</i>	8	6	12	8	6
<i>Sarcophaga albiceps</i>					
<i>Sarcophaga tsushimae</i>	2	4	4	2	0
<i>Sarcophaga tuberosa</i>					
Total	171	269	478	461	344

群集の組成を変化させたものと考えらるべきであらう。この傾向はかすかではあるが3cmのトラップでの群集組成の上にもみられる。

今回の実験では両回共陶器製の直径約13cm、深さ平均1.9cm、全体の高さ平均2.8cmの同形同大の小皿を使用した。これに約150gの魚肉をきざんで平たく盛ると約3cmとなるので、側面からも皿の中の肉はわずかにみえる。この上に置いたトラップの脚高が台の上から約4.5cmの場合に採集能率が最もよいという結果になつたのであるが、ここに求められた脚高は餌の上表からトラップの下縁までの空間の高さに意味があるものか、台から下縁までの高さに意味があるのかは問題である。しかし我々は前にも述べ

たように、トラップの採集効果は餌の置かれている場所の明るさとハエが餌から飛び立つ時の角度に関係すると考えているので、求め得た高さは餌の上表からトラップの下縁までの距離即ち捕束する効果（飛び立つハエが倒ロートにつかまる効果）の最大値を探り得たものと解釈すべきではなからうかと思つている。餌の置かれている所を明るくする事によつて誘引効果をより大にする事が出来るのではないかと考える。例えば硝子容器に餌を盛るとか、トラップ全体を白紙の上に置く場合

の効果を調べる必要がある。今回の実験の条件下で脚高 3cm から 7cm 位までの間では採集されるハエ群集の構成はあまり変わらないようであるが、それより両端へ外れると構成が多少ずつ異なつてくるように見える。脚高の低い、例えば 2cm のトラップでは、生理的機制はわからないが、入り難い種類と入り易い種類とがあるように思われるし、1.5cm 以下になると大型のハエ類は機械的に侵入し難くなる。

摘

要

1) 金網トラップの脚高の効果調べる目的で1954年の11月(実験A)と1955年6月(実験B)とに、多少実験方法を変えて、分散分析法でその結果が吟味出来るような実験計画を立てた。

2) 実験Aでは、日当りのよい2つの建物の中間の空地に、東西に長く机を置き、その上に相接近して一列に印された10の位置に、同質、同型の、但し脚高が0.3cmから10cmまでそれぞれ異なる10個の魚肉金網トラップを、10日間に一巡させてハエの採集を行つた。

3) 実験Aの結果を分散分析法によつて吟味した結果、位置の効果と脚高の効果のある事が有意的に認められ、位置的には列端に多少の効果があるが、更に、明るく開けた方向に向つた位置に著しい効果がある。脚高については約4.5cmのものが最も採集能率が大きい。

4) 実験Bでは、実験Aに使用したものと同質、同大の、但し脚高が2, 3, 4, 5及び6cmと異なるトラップをそれぞれ4個ずつ用意し、それを各脚高のトラップ5個ずつを1組として無作為に4組に分けた。その2組ずつ、即ち10個のトラップを1時間交替に使用して1日に3交替させてハエの採集を行い、同様の実験を2回繰返した。この実験は、実験Aと同じ場所、同じ机上で行つたが、

位置の効果を除くために10個のトラップを一列に並べる位置を前の実験で位置の効果の著しく現われた東東北の方向へ直角に向け、机上での位置は各時間毎に乱数表によつて決めた。

5) 実験Bは5種のトラップによる4回の繰返し実験とみなし分散分析によつて吟味した結果、今回は脚高の異なるトラップによる採集数間に有意的な差のある事が認められ、採集能率の最もよい脚高は4cmと5cmの間にある事がわかつた。

6) 脚高が3cmから7cmまでのトラップでは採集されるハエ群集の構成に殆んど変化は認められないが、それより以上或は以下になると構成が多少変つてくるようであり、1.5cm以下では大型のハエ類は機械的に侵入し難くなる。

7) 脚高の効果は、餌の置かれる位置の明るさとハエが餌上から飛び立つ角度に関係するものと思われるので、今回の実験の結果求め得た約4.5cmという値の持つ意味は餌の上表(台の上から餌の上表まで約3cm)からトラップの下縁までの空間の高さが約1.5cmの場合に餌に誘引されたハエが飛び立つ時に、最も多く倒ロートにつかまるものと解釈出来るように思う。更に、餌の置かれている位置を明るくする事は誘引効果をよりあげる事になるであろう。

文 献

- 1) Omori, N., Suenaga, O. : Studies on the methods of collecting flies. 1 On the effects of setting places and structures of traps of flies. Botyukagaku, 22 : 51-57, 1957. 2) Schoof, H. F. : The attached bait pan fly trap. J. Econ. Ent., 45 (4) : 735-736, 1925.

(昭32. 10. 20 受付)

風 土 病 研 究 所 水 害 日 誌 抄

7月25日、諫早・大村地方は、750ミリの大豪雨あり、21時30分頃、本明川上流の堤防決潰し、俄然、風土病研究所階下は床上3尺の浸水を蒙り、被害甚大。——7月26日、原田事務局長、中山施設課長は急遽、被害状況視察のために来所。——7月27日、古屋野学長は原田事務局長を伴ない、被害状況視察のために来所。——7月28日、応急処置要請のために橋口事務官を本部に派遣。——7月29日、復旧整備対策のために主任会議開催。長崎大学事務職員の一団による排土作業開始、浅野会計課長引率、8月30日まで続行。——7月30日、本部会議室に於いて、長崎移転及び新営工舎の問題に就て、古屋野学長及び原田事務局長の臨席の下に教授会開催。兼任所員、横田、北村、松岡、中沢各教授も出席。——8月1日、長崎移転及び新営工舎の關係に就いて主任会議開催。——8月2日、登倉所長、大森教授、高橋助教授、片峯助教授、吉田講師、岩田事務局長は古屋野学長及び原田事務局長と対談、災害復旧並びに新営工舎に就いて要請。——8月3日、登倉所長及び岩田事務局長は和泉院長を訪い、諫早分院第六病棟の一部を高橋研究室に使用することの諒解を請う。内諾。——8月5日、学生アルバイトの一団による清掃作業開始、相沢教授引率、10間続行。——8月8日、松永文部大臣一行被害状況視察のために来所。——8月9日、登倉所長は原田事務局長、浅野会計課長、中山施設課長とともに、文部省関係各課を歴訪、災害復旧及び新営工舎に就いて陳情並びに請願。——8月17日、登倉所長は、岩田事務局長を伴ない、水害以来の援助に対する感謝の挨拶のために本部及び各学部を歴訪。

損害額：機械及び器具の復旧費 5,345,000円、消耗品流失 94,000円、修復及び清掃に要した諸雑費 355,000円、合計 5,794,000円。

このように不意の災害に襲われて、物質的損害の他、研究記録の一部流失したものもあり、また、応急作業に忙殺されたので、本年度の業績集を編纂することはおぼつかないと思われたが、文部当局、大学当局、大学内外の御援助と御配慮によつて、漸次修旧整備の成るとともに、本年度も業績集の発刊を見るに至つたのは、感謝と悦びに堪えない次第である。(登倉)